

島根大学 ラフカディオ・ハーン研究会 ニューズレター 第13号

編集：島根大学ラフカディオ・ハーン
研究会事務局
所在地：〒690-8504
島根県松江市西川津町 1060
島根大学法文学部 宮澤研究室
発行：2020年 12月 12日

【 研究小論 】

“Yuki-Onna”の謎を読む

宮澤文雄（島根大学法文学部）

小泉八雲の『怪談』（1904年）に収められた「雪おんな」は、「耳なし芳一」と並んで最も親しまれてきた作品である。しかしだからといって、わかりやすいかと言えばそうでもなく、作品は多くの謎を含んでいる。「雪おんな」を読んだ方であれば、心当たりがあるのではないだろうか。その中には、理由が明かされないために謎めいているものばかりでなく、翻訳によって却ってわからなくなってしまう場合もある。そこで、本稿では原文の“Yuki-Onna”を取り上げ、三つの謎を検討しながら、物語の解釈可能性を広げてみたい。

まず、ひとつめの謎は、茂作を殺した雪おんなが巳之吉に対して語りかける場面にある。

“I intended to treat you like the other man. But I cannot help feeling some pity for you, — because you are so young.... You are a pretty boy, Minokichi; and I will not hurt you now. But, if you ever tell anybody — even your own mother — about what you have seen this night, I shall know it; and then I will kill you.... Remember what I say!” (113)

雪おんなは、「巳之吉」と少年に呼びかけ、おまえはまだ若く可愛いから見逃してあげようと言うが、その代わりに今夜の出来事は決して他言してはならないと固く約束させる。

さて、何が謎なのか気づいただろうか。そう、雪おんなは少年と初めて出会ったのに、なぜ彼の名前を知っているのかということだ。この場面で少年が雪おんなに名前を教えたという可能性はない。なぜなら、この引用の前に“*He tried to cry out, but found that he could not utter any sound*” (113)

とあり、少年は驚きと恐怖のあまり声を発せずについて、いわば金縛りにあっているかのような状態だったからだ。すると、雪おんなは少年の名前をすでに知っていたと考えるのが自然だろう。「おまえの母親にさえ (even your own mother)」話してはならないという言葉から推測できるように、雪おんなは巳之吉の名だけでなく、彼が母親と二人暮らしであることさえ知っている。したがって、雪おんなは巳之吉をずいぶん前から知っていたことになる。あるいは、もう少し踏み込んで解釈すれば、雪おんなは茂作を「そっちの男 (the other man)」としか認識していないことから、巳之吉には何か特別な関心を寄せていたと言えるだろう。

“Yuki-Onna”は異類婚姻譚のひとつと見なされているが、ただこのように機械的に分類してしまうと、この物語の特徴が見落とされてしまう。“Yuki-Onna”は他の異類婚姻譚に比べると、短い作品でありながら恋愛や家庭生活の様子が子細に描かれているところに特徴がある。最初に取り上げた謎は、こうした要素と結び付けられるのではないか。もちろん、雪おんなは超自然的存在だから人名くらい見通せるということでもいいが、それでは雪おんなの茂作と巳之吉に対する認識の差は説明できない。

ふたつめの謎は、雪おんながお雪となって巳之吉の前に再び現れた理由である。巳之吉が他言しないという約束を守るかどうか監視したり試したりするために、雪おんなは人間の娘に姿を変えて巳之吉に近づいたと考えてはならない。仮にそうだとすれば、雪おんなは相当に疑り深い性格の持ち主となる。そうなれば、結婚後、巳之吉の母親に尽くし感謝されたことも、巳之吉との間に十人もの美しい子どもを産み育てたことも、そして結末で子どものために巳之吉を見逃したこともすべて疑いや監視の上に築かれたものになってしまうからだ。

では、この謎を解くための鍵は何か。それは、雪おんなが去った後からお雪が登場する間の期間にある。二つの出来事の間に入られた以下の段落のある部分を読み込むことによって、雪おんながお雪として現れた理由は説明できるだろう。

By dawn the storm was over; and when the ferryman returned to his station, a little after sunrise, he found Minokichi lying senseless beside the frozen body of Mosaku. Minokichi was promptly cared for, and soon came to himself; but he remained a long time ill from the effects of the cold of that terrible night. He had been greatly frightened also by the old man's death; but he said nothing about the vision of the woman in white. As soon as he got well again, he returned to his calling, — going alone every morning to the forest, and coming back at nightfall with his bundles of wood, which his mother helped him to sell. (114; underline mine)

恐怖に包まれた夜がようやく明けると、渡し守が戻ってきて、瀕死の巳之吉を救出する。しかし、巳之吉のショックは心身に及び、床に臥せてしまう。しばらくして体調が回復すると、「彼は再び仕事に戻った (he returned to his calling)」と語られる。

ここで気に留めたいのは下線部である。calling は「仕事・職業」の意味で使われているが、念のために翻訳でも確認しておく、例えば、平井呈一訳[1964年]では「巳之吉はまたもとの稼業にもどって」とあり、平川祐弘訳[1990年]では「また仕事に戻った」、池田雅之訳[2005年]では「また仕事に戻るようになりました」、そして最新の訳である南條竹則訳[2018年]では「すぐに仕事に戻り」となっている。いずれの訳者も calling を仕事や職業の意味に解している。

だが、仕事や職業を表す単語は思いっただけでも work, job, task, labour, toil, occupation, profession など様々にある。重要なのは、作者=語り手はこうした候補の中から calling を選んだということだ。なぜ calling でなければならなかったか。日本語訳を読む限り、このような問いは生まれない。元々、calling はキリスト教の用語で「召命」と訳される。神から特別な使命を与えられること、つまり修道者・司祭・牧師になることを指し、のちにルターやカルヴァンを経由して「天職」「職業」という意味を持つに至ったと言われている。

つまり、翻訳によって失われたのは、巳之吉の仕事が「聖なるものと繋がる貴いもの」というニュアンスである。父親代わりであったろう茂作を失い、自分も殺されるかもしれない脅威に晒されているにもかかわらず、巳之吉はひとりになっても職を変えず、一途に打ち込んでいる——「毎朝ひとりで森に入り、夕方、薪束を背負っては帰ってくる。彼の母親がその薪を売るのを手伝ってくれた」。この巳之吉の働く姿を通して、ハーンは彼の仕事を calling と呼んだ。“Yuko”, “On a

Bridge”, “The Case of O-Dai”などの多くの作品に見られるように、ハーンは、庶民を通して日本人のあり様を繰り返し捉えてきた。この巳之吉という庶民の慎ましい清らかな生き方もまた、そうしたハーンの眼差しによって見出された、時代の中で静かに消えゆく微小な輝きなのだ。おそらく、ハーンはここで直感的に calling を選択したのだろうが、しかしそれは彼自身の日本生活の体験と観察を通して導かれた結果だと考えたい。

そして、それは同時に雪おんなの眼差しでもある。お雪の登場が「その翌年 (the following year)」と語られているように、その間ずっと雪おんなはこうした巳之吉の振舞いを見てきたのである。それゆえ、雪おんなが人間の姿になってまでもう一度会おうとするのは、巳之吉が凶らずも雪おんなの信頼を勝ち得たからで、この巳之吉という庶民の最も美しい瞬間を描いたこの場面をおいてない。だからこそ、引用の直後に、お雪が現れるのである。

さいごの謎は、巳之吉が雪おんななどの約束を破り、ついお雪に話をしてしまう件なのだが、なぜ雪おんなは去らなければならなかったのだろうか。大事な子どもたちのためにタブーをおかした巳之吉の命を取らなかったのはわかるが、一体どこに雪おんなが去る必要があったのか。

巳之吉だけでなく、実は、雪おんなもタブーをおかしたと考えてみたい。まずはこの物語の書き出しを見てみよう。

On the way to that forest there is a wide river to cross; and there is a ferry-boat. Several times a bridge was built where the ferry is; but the bridge was each time carried away by a flood. No common bridge can resist the current there when the river rises. (111; underline mine)

茂作と巳之吉の仕事場は、川を渡った先の森である。そのため、彼らは渡し舟に乗って行き来しなければならない。ここまではいいのだが、下線部のこれまで幾度も橋がかけられるが洪水のたびに流されてしまうという部分は、一見、この物語には関係がなく、不要と思われる記述である。しかし、この記述こそ、この物語が執拗に語っていることなのである。ひとつは、川によって隔てられた二つの領域の存在を示すこと。もうひとつは、橋の崩壊が表すように二つの領域を繋げようとすると必ず壊れることである。これらを踏まえると、そこから様々な読み方が生まれるのだが、今回はこれまでの文脈にしたがって解釈していく。

まず二つの領域であるが、それは川によって隔てられた、雪おんなの領域 (非日常の世界) と巳之吉の領域 (日常の世界) を指す。茂作と巳之吉

が襲われたのは、彼らが雪おんなの領域に侵入したからである。したがって、茂作と巳之吉に対する雪おんなの振舞いは、その意味で決して不条理に映らない。だが今度は、雪おんなのほうが巳之吉の領域に侵入してしまう。自己の領域を抜けて別の領域に侵入し、人間と家庭まで築いてしまう雪おんなはタブーをおかしている。しかし、それがタブーをおかしたことになるのは、お雪の正体が隠されているからである。隠されている間は、重なった二つの領域は溶け合っているため、誰にも知られることなくお雪と巳之吉は長らく家庭生活を営むことができる。

しかし、巳之吉の打ち明ける行為は、そうした二つの領域の重なりを公に（意識化）してしまうことに他ならない。それゆえ、巳之吉がつい口を割ってしまうと、お雪がタブーをおかしていることが明らかとなり、洪水で流される橋のごとく家庭生活は崩壊するのである。雪おんなが去らなければならない理由はここにあるのではないだろうか。

以上のように、三つの謎を検討してきた。これまであまり注意を払って読まれてなかった部分を取り上げることができたと思う。とはいえ、本作はまだ謎に満ち、解釈の余地を残す。例えば、茂作の遺体のことがある。どのように埋葬されたかではなく、このことに触れずにおいた書き手の意識に関心がある。他にも“Yuki-Onna”はすでに一個の作品を超え、様々な媒体と結びつき、大きな文化現象を生み出している。この事態の検証によって、ハーンの再話文学の現代的意義を追究できると思われる。今後も“Yuki-Onna”の解釈可能性をさらに広げていきたい。

引用文献

- Hearn, Lafcadio. *Kwaidan: Stories and Studies of Strange Things*. Tuttle, 1971.
小泉八雲『怪談・奇談』平川祐弘編訳、講談社、1990。
——『全訳 小泉八雲作品集』第10巻、平井呈一訳、恒文社、1964。
ハーン、ラフカディオ『怪談』南條竹則訳、光文社、2018。
——『新編 日本の怪談』池田雅之訳、角川書店、2005。

雪おんなとお雪

—「言語文化共通講義 B」を通して— 事務局長 横山 純子

私は今島根大学の科目履修生として言語文化研究科の「言語文化共通講義 B（総合科目・異文化の中の人間）」を履修している。この科目は、

大学院生の必修科目で、4人の先生方がオムニバス形式で講義される。その中に宮澤先生の「雪女」の授業が3時限あった。各時限それぞれ「雪女」の原文、翻訳、映画を取り上げて、原文を考察、原文と比較しながら受講生が疑問点を2、3事前に挙げて、zoomでの講義の時に、その疑問点を各受講生が説明し、皆で議論するものであった。

例えば、私が挙げた疑問点は、巳之吉が縫物をしているお雪を見て、雪女の話をし始めた時、なぜ敢えてお雪は、“Tell me about her.... Where did you see her?” (117)と誘い水をかけたのか。

この疑問は橋正典著の『雪女の悲しみ』にも挙げられている。お雪としては、巳之吉がそのことを話してしまうと10人の子供を残して去らねばならなくなる。それはお雪としては避けたいことである。しかし他の二人の院生からも巳之吉が約束を守ることができるか確認するため等の意見が出た。先生からは雪女はお雪というかりそめの姿をとったが、お雪は一貫して雪女であるというご意見をいただいた。そう考えると雪女に会ったことを話してはいけないというタブーを課した雪女としては、この言葉はごく自然なものとなる。雪女とお雪を別個の人格と捉えていた私には目からうろこであった。第3時限目の授業の前に予習のために再度見た杉野希妃監督の「雪女」の映画でも、雪女はお雪となっても、本質的には雪女であるという視点で、描写されていると感じた。

そして巳之吉がタブーを犯して話してしまい、お雪が自分の正体を明かす場面では、彼女はどんな気持ちだったのかという疑問がある。彼女が巳之吉に言った言葉は、“It was I—I—I! Yuki it was! And I told you then that I would kill you if you ever said one word about it!... But for those children asleep there, I would kill you this moment! And now you had better take very, very good care of them; for if ever they have reason to complain of you, I will treat you as you deserve!” (117-118)池田雅之訳では、「それは、わたしだよ。わたしだ。このお雪だったんだよ。あのとき、もしもひと言でもしゃべったら、おまえを生かしてはおかないと言っただろう。だがな、こうして眠っている子どもたちを見れば、どうしておまえを殺すことができようか。

どうか、この子たちの面倒をよくよく見ておくれ。よもやこの子たちを苦しめるようなことがあったら、そのときこそ、お前も相応の目にあわせてやるさ……」（池田 226）一方、平川祐弘訳では、「あれは、わたし、このわたし、このお雪でひとことした。一言でも喋ったら命はない、と言ってあったはず。……あそこに寝ている子供たちのことがなければ、この瞬間にもあなたの命を奪ったもの

を。いまとなつては子供のことはよくよく面倒を見てください。子供をいじめでもしたら、容赦はしませぬ。」(平川 85) 訳し方にも違いがあり、前者の訳ではお雪の言葉は最初の雪女の言葉の調子と変わらず、その言葉もぞんざいで雪女の怖い感じが伝わってくるが、後者の訳ではお雪の言葉がとても丁寧で、雪女がさほど怖く感じられない。その訳の違いを第2限目に挙げたら、先生からも、巳之吉への呼びかけが、前者は「おまえ」であるが、後者は「あなた」になっており、南條竹則訳、平井呈一訳でも各々「おまえ」、「そなた」と同様であるというご指摘があった。

雪女が10年も人間として暮らしたことで人間らしい部分を身につけたことが訳から読み取れるという先生のご意見も興味深かった。またそこには、ハーンの異文化での体験が投影されているのではないかという先生の説明を聴いて考えさせられた。作品を原文だけでなく、それを訳した翻訳、さらに作品を翻案した映画等と比較することによって、作品をより深く理解できると感じ、興味深い授業だった。作品への創作過程に着目してきたが、作品から展開したものも考察すると、新しい作品論が生まれるかもしれないと思う。

参考文献

- Hearn, Lafcadio. *Kwaidan: Stories and Studies of Strange Things*. Tuttle, 1971.
——・平川祐弘編訳『怪談・奇談』東京：講談社, 1990.
——・南條竹則訳『怪談』東京：光文社, 2018.
——・池田雅之訳『新編 日本の怪談』東京：角川書店, 2005.
橋正典『雪女の悲しみ』東京：国書刊行会, 1993.

*今回ニューズレターに取り上げた「雪女」に関して、当会顧問・小泉凡先生が、小泉八雲記念館の「妖精学」講座(全5回)で、第4回「雪女に魅せられた作家、小泉八雲」(2021年2月6日14:00・zoom受講可)を講義されます。

【 新刊本紹介 】

常松正雄訳、村松真吾編

『ラフカディオ・ハーン

西田千太郎 往復書簡』

(発行：八雲会)

島根大学ラフカディオ・ハーン研究会・前会長の常松正雄先生が上記往復書簡の全訳本を2020

年、6月27日(ラフカディオ・ハーンの誕生日)に、出版されました。「これは、ラフカディオ・ハーンと西田千太郎が、お互いに相手に出した手紙と返事で、現存し、入手可能な書簡のテキストすべてを収集し、全部で150通を全訳して収めたものである。その内訳は、ハーンから西田宛が128通、西田からハーン宛が22通である。」と、同書冒頭の「訳者のことば」にあるように、現在私たちが読みうる両者の往復書簡のすべてが、先生の膨大で貴重なご努力の末に収められています。

ハーンが西田に出した手紙には、明治時代の日本において外国人(または帰化人)として生活する際に起こる好悪様々な事柄や状況に対して、ハーン自身が敏感に反応し、赤裸々に感情や思考を綴っていて、ハーン作品を理解する上でたいへん重要で貴重な示唆がたくさん含まれています。

また、西田は、36歳で病没する短い人生のなかで、ハーンを取り巻く硬軟混ざり合う様々な状況に対して、親切に誠実に懸命に、まさに身を賭して協力し助言していたことがわかります。

この『往復書簡』を読んで、ハーンと西田・両者の生身の姿が手に取るようにわかり、なにか感慨深い読後感が残りました。

(文責：高橋栄)

【 読書会の記録 】

事務局長 横山 純子

第130回例会

2020年11月14日14:00~16:00 総会&読書会

松江市国際交流会館第2研修室 参加10名

“My Guardian Angel”16.8-17.30.

コロナの感染拡大の状況に伴い、3月から読書会を開けずにいましたが、久方ぶりに11月14日に総会と読書会を行いました。作品は11月からハーンのアイルランドでの幼少時代の思い出を記した“My Guardian Angel”を読んでいます。これからもコロナの感染拡大を防ぐために、手洗い、消毒、換気に気をつけながら、有意義な楽しい会を持ちたいものです。

また11月に事務局の所在地が渡部研究室から宮澤研究室に変わりました。これからもいろいろどうぞよろしくお願ひ致します。

編集後記：御多忙にもかかわらず、島根大学・宮澤先生から御寄稿いただきました、ありがとうございました。

(高橋栄)